

氏名	梅原 麻紀
ヨミガナ	ウメハラ マキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第513号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 コラボレーションとアーカイブの研究—アーティスト・コレクティブ の実践をもとに— 〈作品〉 アーカイブ —HAYY（ハイ）—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	古川 聖
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	多摩美術大学	教授		港 千尋

（論文内容の要旨）

本論文は、アーティスト・コレクティブ（以下、コレクティブ）によるコラボレーションとアーカイブの意義を明らかにするものである。研究仮説は、コレクティブの持続的な実践により、新しい芸術創造が可能ではないかということである。ここではコラボレーションは芸術創造における共同制作を、コレクティブはコラボレーションを行うアーティスト・グループのことを指している。

第1章は、コレクティブの実践と密接に関係するキーワードである「アイデンティティ」と「アーカイブ」について検討している。筆者は、2006年にドイツ人アーティストのアナ・ハイデンハインとエルマー・ヘアマンとともにコレクティブ「ニュアンス」を結成し、最近では12世紀のイブン・トファイルの小説『独学の哲学者』をもとにプロジェクト“HAYY—独学のミュージカル（以下、HAYY）”を行った。このような実践を主要な対象として、コラボレーションの可能性を考察している。

第2章は、コラボレーションの先行研究、および「記録」、「他者」、「変容」、「歴史・背景」の観点に留意してアーカイブの先行研究を考察している。匿名性と主体の二重性という役割を持つコレクティブを通してコラボレーションが実践されること、さらには共同制作によるプロジェクトが社会へ発信され、アーカイブへと展開することを具体的に解明している。

第3章では、プロジェクト“HAYY”のコンセプトについて記している。“HAYY”を通して、個人のアイデンティティが確立されてきた哲学の歴史をひも解き、コラボレーションのあり方を問うている。個人の人格形成の歴史を扱いながら、同時に、コラボレーションの理論と実践を取り上げている。主人公ハイは、誰もが自身の中に秘める「もう一人の自分」と「全てを知るもの」との対話の可能性を体現している。自己と他者、隠喩としての「島」と隣の「島」、個人と共同性としての「島」と「群島」について、様々な距離感を検討している。このなかでアーカイブが時空を超えて展開する場では、オルタナティブな創造へ導かれるものと位置づけている。

第4章では、コレクティブの実践とアーカイブについて分析している。プロジェクト“HAYY”は、複数人で体現するハイの人格形成の時間軸を縦糸に、シチリア・イスタンブール・東京・デュッセルドルフ・ベルリンなどの空間軸を横糸にして、その展開の姿を描く。“HAYY”のアーカイブが、プロジェクトを通してどのように変化したのかを以下の順に記している。①対話と映像言語モンタージュ、②アーティストの日常生活、③渋谷の由緒ある神社とジョゼフ・コーススの作品への訪問者の理解、④人間以外の自然や動物との交感の各記録、⑤映像とアーティスト・ブックの編集、⑥様々な組み合わせの可能性の記録、⑦制作過程の記録の陳列、である。同じ登場人物や振り付けであるが、異なる場所で衣装や動作などが微妙に変化し

ながら現れてくるのである。

第5章では、コラボレーションとアーカイブの構造を分析している。考察の位置づけをいったん「ニュアンス」のプロジェクトから離れて検証するために、バリ島の祝祭儀礼におけるコラボレーションとアーカイブ、そして人間性を取り戻すための哲学的思索の視点を取り入れたヴィレム・フルッサーの出版物について考察する。また、レバノンに端を発したマイケル・H・シャンバーグの「タートル」プロジェクトからは、ネットワーク・システムを論じている。美術史の文脈だけではなく、属する社会の伝統の継承をコラボレーションやアーカイブのなかで再構築するために、現代社会での他者性の問題を検討し、議論を掘り下げている。

第6章では、研究仮説で挙げた創造の可能性について、①コラボレーションの芸術創造—複眼的思考で生み出される作品、②芸術創造主体としてのアーティスト・コレクティブ—異質なものの協力で引き出される潜在能力、③芸術創造におけるアーカイブ—未来に出会う他者との喜びの共有という3つの点を指摘し、論文の結論としている。開かれた場としてのアーカイブが記録として残り、後に個人とコレクティブ、あるいは個人とグループのコラボレーションの記憶を呼び起こすことが可能となる。それは、未来に出会う他者と喜びを共有する作品としての意味を持つ。消えていた感覚を再び知覚するだけではなく、鑑賞者自身の解釈によってアーカイブとの新しい関係性を築くことになる。最後に、そのようなアーカイブとのコミュニケーションを通して生起する絶え間ない知覚の反復運動は、単なる反復ではなく、新しい芸術創造をもたらすと結論づけている。

(論文審査結果の要旨)

本論文において、梅原はコラボレーションによる芸術創造の可能性について、様々な視点から資料をもとに、その現代における意義を明らかにした。そして、その過程で生起する活動やその結果として生まれる表現、作品などをアーカイブとして位置付けつつも、それらを単なるアーカイブをこえた次元でとらえる視座を示し、その場にはいない鑑賞者や未来の鑑賞者との対話を可能とする作品表現として新しい位置付けを行った。論文はコレクティブの実践に関わるキーワード「アイデンティティ」、「アーカイブ」の検討から始められ、さらにコラボレーション、アーカイブに関する先行研究に「記録」、「他者」、「変容」、「歴史・背景」の観点から考察が加えられ、つぎにこの論考の核に据えられているプロジェクトの実践、彼女と彼女をとりまくユニット「ニュアンス」により行われたプロジェクト”HAYY”のコンセプトが示された。さらにこの世界各地で行われてきた、プロジェクト”HAYY”のアーカイブが時間軸のなかでどのように変化し展開されてきたか詳論され、それらをもとにコラボレーションとアーカイブの構造分析がおこなわれた。そして最後に結論としてコラボレーションに創造的意義を与え、その主体となるアーティスト・コレクティブとその作品表現としてのアーカイブはあたらし芸術創造の母体となりうるとしている。

このように梅原の論文の特徴はその論考がユニット「ニュアンス」の活動に密接にむすびつき、そのプロジェクトとの相互貫入の関係にあり、実践に裏打ちされていることにある。そのことにより論考には血肉があたえられ、強い説得力あるものになっている。論文の全体の論理構成やバランスは明晰に整理され、考えぬかれた秀逸なものである。以上の理由から、本論文は学位授与に値すると認め、合格とする。

(作品審査結果の要旨)

梅原麻紀はアメリカ、ドイツ、オランダでの留学経験を経た後、ドイツを拠点としつつインドでのレジデンスを経験するなど欧米やアジアで十数年にわたり精力的な制作活動を続けてきた。その関心は現実に内包されるフィクションに注がれ、立体、平面、アーティスト・ブック、写真、映像、インスタレーションによる表現を通して、作品の中で生み出される現実とフィクションをもうひとつの現実として提示することを探求している。

2006年にはドイツ人アーティストのアナ・ハイデンハインとエルマー・ヘアマンと共に「ニュアンス」を結成し、共同制作によるプロジェクトを開始した。博士論文は「ニュアンス」での活動の経験を主軸として

持続的な共同制作の実践における新しい芸術を創造する可能性を考察するものであり、博士作品の展示は博士論文における考察をもとに構成されている。

博士作品「アーカイブ-HAYY-」は映画「HAYY」の上映、HAYYに関するインタビュー映像の上映、HAYYに関する資料展示という3つの要素からなる。映画「HAYY」は12世紀の小説『独学の哲学者』をもとにした「ニュアンス」のプロジェクト「HAYY-独学のミュージカル」のイタリア、ドイツ、東京における記録映像である。壁一面に投影された映像の中心に対し少しずれた位置に置かれた観客席は、この上映が不可侵な「作品」の一方向的な提示ではなく、鑑賞者の意識を複眼的に広げるアーカイブとしての展示であるという作者の意図を示す。映画には異なる文化的背景を持つ者同士が様々な土地で数日にわたる共同生活を送りながら制作・発表を行っていく中での変化が記録されており、コラボレーションにおける創造的可能性を考察する上で非常に示唆に富む。二つ目の要素である展示壁に取り付けられたディスプレイに映し出された映像は「HAYY」プロジェクト参加者に梅原が行ったインタビューであり、フィクションを検証するドキュメントというフィクション、といったメタ表現的構造を持つ点が興味深い。三つ目の要素は物質的資料であり、「HAYY」のポスター、アーティスト・ブック、映画「HAYY」のオリジナル版が保存されたUSBスティック、博士論文などが展示された。これらは取り出し使用され得るアーカイブであり、鑑賞者によって新しい解釈が生み出されることを歓迎するもので、芸術創造の可能性に対する作者の信頼と希望を感じさせる。

審査会では、梅原が十数年にわたって異文化と交流し続け、意見を交換することで互いに新たな視点を獲得し、他者や歴史を知る経験を積み重ねながら新しい表現を真摯に探求してきた活動の集大成であり、芸術創造におけるコミュニケーションの意義を再考させる意義を持つ優れた作品として本作品を評価し、全員一致で博士の学位を認めると判定した。

(総合審査結果の要旨)

梅原麻紀の作品及び論文は、コラボレーション（共同創造）とアーカイブ（記録資料体）に関する深い経験と考察に導かれ出来上がったものである。梅原自身、ドイツ人アーティストと「ニュアンス」というアーティスト・コレクティブを組み、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで国際的に活動しているが、今回の博士作品「アーカイブ HAYY」ではそうした10年近くに渡るユニット活動を総括し、編集し、読み換えながら独自の想起と共有の場を提示するものである。“HAYY”は、主人公ハイの人格形成の時間の流れを縦糸に、シチリア、イスタンブール、東京、デュッセルドルフ、ベルリンといった都市の移動を横糸にして、各プロジェクトを通しハイがどのように変容していったのかが描かれる。

論文もまたそうした方向に沿い、近年、重要性を増す、異なる文化環境における共同創造の可能性に関する優れた論考になっている。国籍、言語、民族、ジャンルを異にするコラボレーションの形式であるアーティスト・コレクティブの長期に渡る継続的な実践やその情報を記録し、資料体とし新たな芸術創造へ繋げることの可能性に関して、自身の様々なプロジェクトの経験から説得力に富む形で論じられている。共に創造するとはどのようなことなのか、その創造のプロセスで他者と交流し、価値を分かち合うことは何を契機として可能になるのか。また他者との出会いを通し、さらなる創造を生む上で大切なことは何なのか。こうした問題への洞察に満ちた論考は、アーティスト・コレクティブを目指す人々にとって有意義な指針となるだろう。

作品及び論文ともに内容や構成をよく練られたものであり、博士号に値するものと判断する。